

Steel Landscape

鉄の点景

景観の内に潜んだ鉄

青山アパートメント・ハウス

自動車、鉄道、船、橋、タワー等々、私達のまわりで一見それとわかる鉄の景観は数多い。一方、外観からは視えないが、鉄に内側から支えられて成り立っている景観はさらに多い。鉄の真骨頂は構造材であり、たいていは何かの衣をまとっているからだが、そうした衣をまとった鉄の点景のひとつを訪ねて見よう。

東京シャンゼリゼ

明治神宮から青山通りに至る表参道は、あまたある東京の目抜き通りの中でも別格の垢抜けた街並みである。並木に縁取られた幅広い道の両側に洒落たブティック、レストラン、カフェテラスが建ち並び、華やかな中にもどこか落ち着いた一種独特の風格がある。

洒落た建物が建ち並ぶだけのことなら今どきの都会風景では珍しくもないが、表参道に一味違う雰囲気を添えているものの正体是一群の古びた建物の存在なのである。大正末期から昭和初期にかけて建造された青山アパートメント・ハウス、俗称青山アパート、別名同潤会アパートとも呼ばれる鉄筋コンクリート造りの中層集合住宅がそれである。古色蒼然たる外観は荒廃と紙一重だが、青山アパートメント・ハウスの場合は古さ

が風格と化し、街の個性を際立たせる大きな要素となっている。東京の中心街の多くは第2次大戦後復興したものであり、しかも戦後半世紀の間にスクラップ・アンド・ビルドが進み、現在の街並みは2代目、3代目となっている。その中で、表参道は70年以上も経た古い建物が目抜きの通りに沿って連なり、周辺のファッショナブルな最先端の風物と調和し、風趣あるたゞまいを醸し出している。このような街は類がない。東京のシャンゼリゼと呼ぶ人がいたとしても、まんざら大袈裟でもない。

日本最古の公共鉄筋アパート

青山アパートは、現存する日本最古の鉄筋コンクリート造り公共アパートである。住宅様式として日本最初の非木造集合住宅であったばかりでなく、日本最初の大規模で計画的な

公共住宅建設事業の一環であり、その後日本の住宅政策を支えた公団住宅や各種公共アパートのはしりであった。いろいろな面で、近代日本に新時代を画したモニュメンタルな存在のひとつといつてよいだろう。

この事業を担ったのは財団法人同潤会で、「同潤会アパート」という通称の由来でもある。同潤会は、1924年（大正13年）、政府の補助で住宅の計画、建設、管理までを一貫して行う日本で初めての公的組織として生まれた。急速な近代化の中で、日本でも都市問題、住宅問題が国家的要請として浮上し、1919年（大正8年）にはすでに「都市計画法」や「市街地建築物法」が制定されていたが、そうした機運を一挙に促進したのが150万人以上の人が住宅を失ったといわれる1923年（大正12年）の関東大震災である。

同潤会は、震災復興計画の目玉として義援金と政府の補助金を財源に創設され、大規模な住宅の建設・供給プロジェクトを展開、その一環として東京と横浜合わせて16箇所に総戸数3,000戸にも及ぶ当時としては空前の大アパート群をつくりあげた。青山アパートはその数少ない生き残りのひとつで、3階建て10棟、総戸数137戸、1925年（大正14年）11月に起工、1927年（昭和2年）4月に竣工し、以来70年余の風雪に磨かれた姿を今日に伝えている。

再評価対象の貴重なモデル

同潤会アパートが生まれた1920年代は、大正デモクラシーの時代と呼ばれ、日本近代史上に一つのユニークな時代を画している。躍進期のエネルギーに満ちた自由闊達な息吹は政治や経済面だけでなく、社会現象や風俗にも及んでいた。建築分野でも当時の世界的風潮であったモダニズムが追求され、さまざまな実験的、革新的な試みが繰り返られていた。丸ビル、帝国ホテル、明治生命館などの歴史的建造物をはじめ、病院、学校、図書館、教会など後に保存の対象となる建物の多くがこの時期に建てられている。

こうした時代の雰囲気のもと、同潤会アパートは、「鉄筋コンクリートという未知の住宅構造に、豊とふすまから成る日本の伝統的居住空間をみごとに調和させる」という画期的な試みを成功させ、以後の日本における都市型集合住宅の基本パターンを定着させたのである。

また同潤会アパートの歴史的意義は、また、それが鉄を材料として使ったはじめての大規模集合住宅であったということ

にもある。当時日本の鉄鋼業はまだ発展途上にあり、軍需をはじめ工業機械用など国策に見合う需要を賄うのが精一杯で、民需にはほとんど見るべきものがなかった。鉄の建造物への使用は大型の公共施設、土木構造物に限られ、小規模建築物、まして住宅に使用することなどは考えられなかった。しかし、幾多の先駆的研究が実を結び、鉄筋コンクリート構造のすぐれた耐震性、耐火性が認められるに及んで、関東大震災復興計画を契機に、鉄は主要建築資材のひとつとして日本最初の都市型中層集合住宅に全面的に採用されたのである。これは、鉄が大衆に身近なレベルで、それと目には見えないが、集中的かつ大量に使用されたおそらく最初の例ではなかったろうか。今日、建築分野は鉄の重要なマーケットとなっているが、同潤会による鉄筋コンクリートアパート建設事業は、まさしくその端緒を開くものであった。

同潤会アパートは、1934年（昭和9年）建設の江戸川アパートをもって終わりを告げ、日本における鉄筋コンクリート集合住宅の建設は休眠期に入る。日本が軍国化へ急進して鉄は戦略優先物資となり、住宅資材としての使用が困難になったからである。そして1941年（昭和16年）には同潤会そのものもほぼ18年間に及んだその歴史に幕を下ろすことになる。

しかし、同潤会によって開かれた都市型公共集合住宅の理念と事業は、戦後、住宅公団によって引き継がれ、日本の住宅政策推進にきわめて大きな役割を果たしていくのである。現在、同潤会作品の多くは再開発で消滅してしまった。同様に青山アパートも再開発構想がある。しかし、青山アパートは、残り少ない遺産として、また将来の公共住宅を考える上で貴重なモデルとしても昨今再評価され、さらにパリのシャンゼリゼを彷彿とさせる表参道の名物として多くの人々を魅了している。このようなこともあって、テレビにも取り上げられるなど多くの関心を集めている。

■参考文献

- ・特集 生活史・同潤会アパート（松本恭治編、「都市住宅」1972年7月号）
- ・同潤会アパートメントとその時代（佐藤 滋他著、鹿島出版会刊）
- ・集合住宅団地の変遷（佐藤 滋著、鹿島出版会刊）
- ・同潤会アパート原景（マルク・ブルディエ著、住まいの図書館出版局刊）
- ・シリーズ 集って住む風景／同潤会代官山アパート（大月敏雄著、住宅建築1996年10月号、12月号）
- ・特集 同潤会アパート（東京人1997年4月号）
- ・写真集 幻の東京一対象・昭和の街と住まい（柏書房刊）